

熱愛を祈願します！

この世には八百万やおよろずの神がいるという。

学問の神様、商売繁盛の神様、五穀豊穰ごこくほうじょうの神様、台所の神様、トイレの神様……
そして――

恋の神様も、もちろんいる。

午前九時。東京、臨海部にあるオフィスビル。

地下駐車場に停まった高級車から、春らしいアイボリーのスーツを着た女性が降りた。足にはジミーチュウの、エレガントなピンヒールを履いている。

うやうやしく頭を下げて、有吉美香ありよしみかは出迎えの挨拶あいさつをする。

「おはようございます、社長」

「おはよう、有吉。もうすぐ四月だというのに、今朝は冷えるわね」

「はい、社長。オフィスは昨日より暖かくしてあります」

美香の返事に、女性は満足そうな表情を浮かべた。

彼女は藤堂希和子。女手一つで二人の息子を育てながら藤堂フーズを創業し、十年足らずで業界トップに押し上げた人物だ。

日本経済界の大物を実兄に持つ彼女は、今最も旬な女性実業家。そして目下のところ美香のボスである。

「会議の前に温かいものが飲みたいわ」

エレベーターに向かって歩き出しながら、希和子が言った。美香は運転手から希和子のバッグを受け取ると、急いでボスの後を追う。

「すぐに温かいものをお持ちいたします」

「ダブルのソイラテにしてね。それと、くれぐれも早く。わかっていると思うけど、あたし——」

希和子はちらりと美香を振り返り、プレッシャーをかけるような視線を送ってきた。

「待たされるのは嫌いなもの」

「承知いたしました、社長」

そつなく返事をしてから、美香は心の中でソイラテ、ソイラテ……と繰り返して、先を急いだ。

有吉美香、二十七歳。今日も社長秘書としての一日が始まる。

目がくらむような高層ビルにあるオフィスの中、スーツにパンプスで忙しく立ち働く。編み込んだ髪は後ろにまとめ、シンプルなアクセサリーに控えめな香り。服もメイクも派手すぎるのはNGだが、やぼったい身なりは社長の眉間に皺が寄る。

藤堂フーズは、食材の定期宅配サービス「ハッピーママ」を運営する会社だ。社長の希和子がシ

ングルマザーで二人の息子を育てた経験をいかし、「頑張るママを応援する」をコンセプトに、ぱぱっと作れるお惣菜セットから産地指定の厳選食材まで、幅広い商品を扱っている。

創業以来、仕事や育児に忙しい主婦層を中心に、利用者をぐんぐん増やしてきた。

そんな成長著しい会社の、栄えある社長秘書となった美香だが、第二秘書である彼女の業務内容は雑用がほとんど。朝は一番に出勤してオフィスの準備を整え、社長を出迎えた後は飲み物や軽食の用意。電話の取り次ぎはもちろん、来客の対応、社長の肩揉みに使いつ走り……などなど。社長が快適に仕事できるように、気を配ることが業務の中心だ。

スケジュール管理や出張のお供は、ペアを組んでいる先輩秘書の高木悦子がやってくれる。

「ソイラテを買ってきます」

社長室に着くと、美香は悦子に後を任せてオフィスを出た。この時期の社長のお気に入りには、近所に店舗を構える外資系コーヒチェーン店の、ダブルソイラテエクストラホット。トールサイズ。デリバリーはしてくれないので、必要に応じて美香が買いに走る。

「お願いね」

そう答えた悦子は三十五歳、独身。秘書歴は十年近い。英語、イタリア語、中国語を操る才女で、その上おしゃれ。悪い人ではないが、絶対に使い走りはやろうとしない。

まあいいか。デスクワークより、お使いのほうがわたしには向いてるし。

美香は外国語全般が苦手だし、OLの経験もない。持っているのは、幼稚園教諭の免許と保育士の資格に自動車運転免許くらいだ。

藤堂フーズには「すすくつこルーム」という会社直営の企業内保育所がある。美香はその保育士募集の求人を見て、この会社にやって来た。それなのに社長秘書に任命されてしまったのは、運命のいたずらというべきか。

いや、仕事の神に見放されたのかもしれない。

美香が希和子の秘書になったのは、去年の夏だった。その年の春までは、キリスト教系の幼稚園で先生をしていたが、園長のパワハラに耐えかねて退職していた。

それから数カ月。心機一転、再就職を決心した美香は、すすくつこルームの求人情報を見つけて見学に訪れた。

すすくつこルームはこぢんまりとした保育所だったが、明るく清潔で、子どもたちがのびのび過ごしていた。さらにこの園は病児保育にも対応しているので、子どもが急病の時でも親は仕事を休まずに済む。

まさに親にも子どもにも素晴らしい環境で、勤務条件も悪くない。美香は強く心を惹かれた。

ぜひ、ここで働きたい。ここでたくさんの子どもたちを笑顔にしてあげたい。そう思っただけで採用試験に臨んでみると、とんとん拍子に選考は進み、最終面接の場に希和子が現れた。

「肩が凝ったわ。揉んでくれないかしら、有吉さん」

エレガントなほほ笑みを浮かべながら、カリスマ社長は何とも突飛な要望を言ってよこした。藤堂フーズについてはホームページで調べた程度の知識しかなかったが、希和子がたびたびテレビに

出ていたこともあり、彼女の顔と名前は知っていた。

これも何かの適性を見るのだろうと、美香は求められるまま、社長の肩を揉み始めた。

すぐに希和子が心地良さそうな声を上げる。

「あなた、上手ねえ……。力加減がちょうどいいわ」

「ありがとうございます。以前の上司も肩凝りがひどくて、たびたび揉んでおりました」

気を良くした美香は、ついついそんなことを言ってしまった。元上司の園長は希和子と同世代の女性だったが、人使いが荒く、よく肩や腰のマッサージをさせられていたのだ。

「そうなの。どうりで上手なはずだわ。素晴らしい才能をお持ちよ」

「才能だなんて……。ただ子どもの頃からピアノを習い、学生時代はテニスもやっておりましたので、指の力や握力が強いのだと思います」

「まあ、ピアノにテニス。素敵な趣味だわ。あ、あ、そこそこ……。うーん……」

気持ちいいわあ……。と、希和子があまりにも無邪気に喜ぶので、美香は心を込めて肩を揉み続けた。今思えば、それが運のツキだったのかもしれない。

やがて希和子にはっこりほほ笑むと、人事部長に命じた。

「彼女はあたしの秘書にしてちょうだい」

「はい？」

顔を見合わせる美香と人事部長に、希和子はきっぱりと言いつつ放った。

「聞こえなかった？ 有吉美香は社長室付の秘書で採用よ。有吉さん、明日から入社してちょう

だい」

「でも、わたしは保育士の求人を見て……」

「代わりの秘書が見つかるまでよ。見つかり次第、すくすくつこルームに異動させてあげるから。それまで頑張りなさい！」

有無を言わさぬ希和子の勢いに圧倒され、美香は拒否することができなかった。後で聞いたのだが、ちょうど前任の第二秘書が辞めたばかりで、希和子は肩揉みが上手な人材を大至急で探していたのだそうだ。

以来、美香の新米秘書としての日々が始まった。

業務中に肩が凝れば――

「肩が凝ったわ。有吉、揉んでちょうだい」

「はい、ただいま」

経済番組に出演するため、テレビ局に行った時も――

「スタイリストが用意した服が気に入らないわ。すぐにテレビ局まで別の服を持って来て」

「すっ、すぐにお届けいたします！」

さらには、ロシアからVIPを迎える時に――

「ロシアからお越しになるお客様が、忍者に会いたいそうよ。手配して」

「はい、え、忍者？」

社長のリクエストは私用も含めて膨大な量だった。残業なんて当たり前、深夜だろうが休日だろ

うが、お構いなしに携帯に連絡が入る。悦子の話では、前任の第二秘書は一カ月もたずに辞めたらしい。

しかし美香だけが厳しくされているのではなく、社員全員が高い水準を求められているのだ。有能と認められれば、年齢や性別に関係なくチャンスを与えられる。逆に無能の烙印を押されてしまうと、古参であってもバツサリ切られる。

そのため、社員たちは陰で社長を「ピンヒールを履いた悪魔」と呼び、恐れていた。

新しい秘書さえ見つければ、すぐにも保育所に異動できる。そう信じて頑張っている美香だが、半年以上経ったのに、いまだに代わりの秘書は来ない。仕事の神は間違いなく自分を見捨てたのだと、近頃真剣にそう思う。

「どうした。暗い顔して」

買ってきたラテを手に、美香がエレベーターを待っていると、隣に人が立った。顔を上げなくても誰だかわかる。こののびやかな甘い声と、その場にいるだけで人々の注目を集めってしまうような存在感。

「専務」

希和子の次男で、この会社の専務を務める藤堂貴大がそこにいた。今日も仕立ての良さそうなスーツに身を包み、後ろには坂田という、若い男の秘書を従えている。

「また社長のバシリか」

からかうように言うと、貴大は美香の手にしたラテを見てぶつと噴き出した。

「パシリだなんて……。これがわたしの仕事ですから」

後ろで坂田も笑った気がして、美香はとても恥ずかしくなった。

「悪い。冗談が過ぎたな。確かにそれも大事な仕事だ」

「いえ……」

「有吉がいつも骨を折つてくれるから、社長が気持ち良く仕事ができる。結果、俺たち役員や各部署のトップへの風当たりも弱くなり、社内にも平穩が訪れ、仕事の効率が上がる。みんな有吉には感謝してるよ。そうだよな、坂田」

「はい、専務」

坂田は美香をちらりと見ると、ほとんど表情を変えぬまま返事をした。

一応は褒めてくれてるらしい。美香の沈みかけた気分が、じわじわと浮上し始めた。

貴大はいつもこうだ。顔を合わせるたびに、元氣か？ 飯食ったか？ 残業ばつかするなよ、な

どと声をかけてくれる。

重役なのに気さくな性格で、ちよつぱり俺様な一面もあるが、基本的には誰にでも親切だ。

年齢は三十歳。陰で悪魔と呼ばれている母親には顔も性格も似ておらず、その風貌はとろけるほどにハンサムで、希和子の長男で副社長を務める大輔共々、「独身極上ブラザーズ」と囁かれ、社内多くの女性を虜とりこにしている。

「有吉。もつとこつちに来いよ。ラテを落とすぞ」

「は、はい……」

エレベーターは、思ったよりも混んでいた。貴大は体の向きを変え、美香とラテが押し潰されないように、自分の腕でガードしてくれる。

美香の頬は、長身の貴大のスーツの胸に押し当てられた。

「専務、あの……」

「じつとしてる。でないと、こぼすぞ」

「は、でも」

ど、どうしよう。これじゃあ、まるで――

まるで満員電車の中で抱き合うカップルのようだ。顔を上げれば、貴大と至近距離で見つめ合うことになってしまう。けれど無理に動けば、社長のラテが潰されかねない。彼が身に着けた爽やかな香水が鼻をくすぐり、美香の心臓はバクバク鳴り出した。

どうか、彼に聞こえませんが……

目的の階に着くと、美香は慌てて貴大から離れ、エレベーターを降りた。そして一緒に降りた彼に、頬を赤らめながら礼を言う。

「ありがとうございます」

「いや。それより顔が赤いぞ。熱でもあるのか」

「熱なんか、ありません……」

あなたのせいです――

入社してから、ずっとずっと、憧れてきたのだから。しかしそれは口にできない。彼の周りには、彼を狙う美女がうじゃうじゃいる。美香のような平凡な容姿の雑用係などお呼びじゃないのだ。

しかも以前に悦子から聞いた話では、貴大は希和子の意向でたびたび見合いをしているらしい。希和子の兄は日本有数の大企業である、藤堂グループ総帥の藤堂和明だ。となれば見合いの相手も、良家の子女に違いない。

貴大は優しいから、自分のことを気にかけてくれる。だけど、身の程はわきまえなくてはと、日頃から美香は思っていた。

お先に、と貴大に一礼し、美香はソイラテを持ったまま廊下を急いだ。しかしすぐに貴大に追いつかれた。社長室はこの突き当たりなのだが、専務室も同じ方向なのだ。

ちなみに秘書室も同じフロアにあり、室長と役員付ではない秘書たちが詰めているが、美香と坂田は、それぞれのボスの部屋の前に席を用意されていた。

「有吉」

「はい？」

美香と並んで歩きながら、貴大が話しかけてきた。

「最近どうだ？」

「どうだとおっしゃいますと？」

「仕事だよ。無理してないか？　いくら社長相手でも、できないことはできないと言っているいいん

だぞ」

上方から、優しい視線が降り注いだ。この会社で美香にこんな言葉をかけてくれるのは、たぶん貴大だけだろう。他の社員は社長の機嫌を損ねないように立ち回ることで精一杯で、美香のような雑用係を気づかう余裕はないのだ。貴大の優しさに触れて、胸の中が温かいもので一杯になった。

「ときどき、難しいご要望をいただきますが、なんとかこなっております」

実際はときどきではない。しょっちゅうだ。しかしそこは貴大の手前、呑み込む。

「そっか。ありがとう」

「はい？」

「おふくろのワガママを聞いてくれて。礼を言うよ。役員と息子と、両方の立場から」

美香は足を止めた。嬉しくて涙が出そうだった。

貴大は数歩進んでから、両手をスラックスのポケットに差し込んで振り返る。

「いえ、だって、これがわたしの仕事ですから……」

「そうか。じゃあ、君の仕事を頑張れよな。そのうち飯でも奢るから」

端正な顔にセクシーな笑みを浮かべ、貴大は専務室に消えた。その後坂田が続く。

見送る美香の胸はきゅんきゅん鳴っていた。仕事の神には見捨てられたが、恋の神はまだ諦めるなど言っているみたいだ。

手の届かない相手。けれど想い続けるのは自由だということだろうか。

イケメンの笑顔は、疲れた心に栄養を補給してくれるサブリミたいなものだ。けれど時間が経つと、その効力は消えてしまう。

四月に入って最初の金曜日。貴大は昨日から大阪に出張している。エレベーター前で励まされた日以来、顔を合わせても食事に行く話は出なかった。

ほらね。やっぱり社交辞令。期待するだけ無駄なのよ。

午後九時を回り、一人で社長室の片付けをしていた美香は、残念な気持ちで一杯になった。

社長は夕方から、悦子を伴い同業者との会合に出ている。今頃は仕事の話も終わり、ホテルでの会食の最中だろう。それが済めば、二人ともまっすぐ帰宅する予定だ。

「ホテルのbuffetか。わたしなんて……」

リフレッシュルームに常備されている冷凍グラタンを、残業の合間にレンジでチンして一人で食べた。食材宅配会社なので、社員のために無料の軽食が用意されているのだ。他にはパンやフルーツ、飲み物もそろっている。

来週になったら、退職願を出そうかな。

もくもくとデスクまわりの片付けを進めていくうちに、美香の頭にはそんな考えが浮かんできた。

秘書の仕事には慣れたと思っている。悪魔のような社長ではあるが、あれでなかなか可愛いところもあるのだ。美香が肩を揉んであげると心から喜んでくれるし、残業代もケチらない。髪型はこうしてみなさいとか、こんな色のブラウスが似合うとか、少々強引だが的確なアドバイスをしてくれる。それに従った結果――

「美香、オシャレになったわねえ」

去年の暮れに実家に帰ると、母親にそう言われた。久々に会う友人の反応も同じだった。褒められて悪い気がするはずもなく、だったらもう少し秘書を頑張っちゃおうかな？ ……となつてしまったのだ。しかし、ふと冷静になった時、やっぱり子ども相手の仕事に戻りたくない。社長好みのスタイリッシュなスーツやパンプスで過ごすより、動きやすい服にスニーカーで園庭を走るほうが性に合ってる――巡り巡って、こんな結論に落ち着くのだ。

だが、この調子ではすくすくこのルームには異動できないと思う。永遠に。

「やっぱり神様なんかいないわ。いるのは、ピンヒールを履いた悪魔だけよ」

金曜日だというのに、デートの予定もない寂しい現実。自分は社長に上手く丸め込まれているのだというストレスが高じて、美香はつい愚痴を漏らしてしまった。するといきなり背後でドアが開く音がした。

「何をぶつぶつ言ってるんだ？」

「きゃっ！ せ、専務……！！」

驚いた美香が振り返ると、社長室の入り口に貴大が立っていた。いつ大阪から戻ったのだろう。

「驚かせてごめん。明かりがついていたから、おふくろがいるのかと思ったら、やっぱり君だったのか」

半ば冷やかすような口調で言うと、貴大はすたすたと中に入って来た。どうやら社長の悪口の方は聞いていないらしい。美香は、ほっと胸を撫で下ろした。

「社長はホテルでの会合の後、そのまま帰宅のご予定です。急ぎのご用件でしょうか？」

「いや、そうじゃない。君一人か？ 高木はどうしたんだ」

「社長のお供の後、直帰すると連絡がありました。わたしも片付けが済んだら帰ります」
「そうか」

貴大は腕時計を確認しながらゆつくりと近付いて来た。空気が動いて、彼のまとうシトラスの香りが鼻をくすぐる。

この香り、嫌いじゃない。爽やかすぎず、ほのかに甘い。この前エレベーターの中で嗅いだから覚えてる。

スーツはどここのブランドだろう。銀座辺りに店を構える老舗のテーラーだろうか。

もしくは母親がヨーロッパの高級ブランドが好きだから、そちらかもしれない。例えばアルマーニとか、グッチとか。どちらにしる、長身で肩幅のある彼だから、なんでも似合いそうだ。そして思う。

どうして彼は、あの社長の息子なんだろう。

いずれどこかの社長令嬢と結婚するのだろうか、下手に近付かないでほしい。優しくされたら

期待してしまう。高鳴る胸をどう鎮めたらいいかわからなくなる。

彼への想いが募りすぎて、どうにかかなりそうだった。そんな美香に、腕時計から視線を上げた貴大が声をかける。

「食事はまた今度だな。そろそろ切り上げろ。家まで送るから」

「え？」

美香はぼかんと口を開けたまま、まじまじと貴大を見た。

「俺の車で君を家まで送ると言ったんだ。実は今日、君を食事に誘うつもりだったが、大阪での仕事がなかなか片付かなくて、こんな時間になっちゃった。すまないな、俺のほうから言い出したの」

先日言っていたのは、どうやら本気のお誘いだったらしい。奈落の底まで落ちかけていた美香の気分は、彼の言葉に救われぐんぐん浮上していった。

「ありがとうございます。でも、わたしのことならお気になさらずに。電車で帰りますから」

「遠慮は禁物だ。食事は来週の金曜にしよう。他の予定を入れるなよ」

「でも、あの……」

「くどいぞ。それとも何か、俺の車には乗れないとでも？」

「いえ、そんなわけでは……」

「じゃあ、どうして。俺に家を知られたら困るとか？」

「そんなことはありません！」

また一步貴大が近付いて来て、思わず後ずさった美香のお尻にデスクがぶつかる。これ以上逃げられない。今夜の貴大は、いつもとは何かが違うみたいだ。

「じゃあ、余計な気を回すな。人の厚意は素直に受け取るもんだ」

貴大の男らしい黒い瞳が、すぐそばに迫った。

どうしよう、断れない。だって彼が好きだもの。

これは一人で残業していることへのご褒美だろうか。だったら、いっそ素直に受け取ってしまおうか。

「はい……じゃあ、お言葉に甘えて」

貴大の熱意に負けて頷けば、彼は表情を和らげて美香の腕をそっと叩いた。

「十五分後に駐車場だ。遅れるなよ」

貴大の車は黒のドイツ車だった。車高が低めのツードアのボディは、顔が映るくらいぴかぴかに磨かれている。美香を助手席に乗せると、貴大はカーナビをセットして発進した。臨海部にある本社ビルから美香の住むマンションまで、三十分の距離だとナビが告げる。

「聞いてもいいか？ 有吉」

車を発進させてすぐに、貴大が口を開いた。

「はい、なんででしょうか」

「そろそろ辞めたくなくなったんじゃないか？ 前の秘書は、おふくろがあまりにもこき使うんで、あ

る日突然来なくなり、退職願を郵送で送り付けてきたよ」

心の中を読まれたみたいで、美香は息が止まりそうになった。

「楽な仕事ではありませんが、いつかすくすくつこルームに異動させてもらう約束なので」

「そっか、有吉は保育士募集の求人を見てうちに来たんだっけか」

「はい」

貴大に直接話したわけではないが、秘書に採用された経緯は社内に知れ渡っている。

「元はキリスト教系の幼稚園で教えていました。保育士の資格も持っております」

美香は今とは違う日々を思い出す。あの頃は、社長ではなく子どもたちを出迎える朝から一日が始まった。

春には遠足や写生会、夏はプールに花火。クリスマスの朗読劇や聖歌隊の指導もやった。お給料は今ほど高くはなかったし、中には問題を抱えている子どももいたが、子どもたちに教えることは楽しかった。

「幼稚園はどうして辞めたんだ？」

「一昨年、園長が変わったんです。新しい園長は、それはそれは暴君でした」

「なんだか、うちの社長みたいだな」

貴大の声は、明らかに笑いを含んでいた。

「そんなことは……、確かに社長は厳しい方ですが、理由もなく部下を怒鳴ったりしません。それに残業や休日出勤をした場合は、きちんと手当をくださいます。けど園長は……」

その時の気分で職員に当たり散らすし、休日には無報酬で私邸の草取りまでさせられた。

「情緒不安定で、公私混同型……ってどこか」

「そんな感じですよ。あと、寄付の額で子どもを差別したんです」

親が裕福で多額の寄付を見込める子どもは、多少の悪さをしても大目に見られた。そんなこと、教育の場ではあつてはならないことだと美香は思っている。

「すごい園長だな。ところでキリスト教系ということは、礼拝をやったりしたのか？」

「はい。一日の始まりはお祈りからで、食事の前にも神に感謝の祈りを捧げます」

ふうーん、と何やら楽しげに貴大は相槌を打っていたが、やがて真面目な声で言った。

「もしかして、有吉はキリスト教徒なのか？」

「いいえ。前の園はクリスチャンでなくても採用されました」

「そうか、安心した。ついでに君の家族構成は？」

「……両親と弟が一人、川崎に住んでいます……って、あの……専務。何が安心なんですか？」

美香の問いに、貴大は前を向いたまま、大げさに首を横に振って見せた。

「いや、こつちのことだ。それで暴君の園長にムカついて、啖呵を切って辞めたとか？」

今度は美香が首を横に振る番だった。

「そんな勇氣ありません。園長の方針ですから従っていました。けど、一度だけ園長に意見したらその直後からいじめというか、その……」

「パワハラか」

「はい。わたしだけ無視されたり、一人ではできそうもない仕事を押し付けられたり……。それでストレスで体調を崩して入院したんです。もう、辞めるしかないって思いました」

園内で孤立させられ、不眠や神経性の胃炎に悩まされた。今思うと、メンタルの弱さを痛感する。「なかなかの修羅場を体験してるんだな。それなのにまた、おふくろみたいなボスの部下になるとは」

望んでなかったわけじゃない。ついてなかっただけだ。

そうは思ったが、秘書になってから嫌なことばかりではなかったと思ひ出し、努めて明るい声で言う。

「でもなんとか半年頑張ったし、そのうち新しい秘書が来てくれるはずですから」

「だと、いいけどな」

「えっ！ 来ないんですか？」

「いや、冗談。その辺は俺は知らないんだ」

「そうですか」

「でも、許してやってほしい。ああ見えて、色々と苦労してるんだ。うちのおふくろは」

「専務」

「周りに厳しくするのは、自分もそういう扱いを受けてきたから、つい……な」

「社長が……ですか」

「そう。もしもつと聞きたいなら、来週の食事の時に話すよ」

社長の過去――

三十代で離婚。以来シングルマザーで奮闘し、スーパーのお惣菜売場からチェーンの弁当屋勤務を経て、四十代で食材宅配会社を起業。実兄は経済界の大物、藤堂和明氏……

美香はそれくらいしか知らない。希和子はたびたびテレビに登場するが、彼女の結婚について、特に貴大と大輔の父親については何も公表されていないのだ。

「お誘いは嬉しいのですが、わたしなんか専務とご一緒してもよろしいのでしょうか」

「いけない理由なんてあるのか？ 会社を離れたら、ただの男と女だろ」

た、ただの男と女――

びっくりして言葉が出ない。そんな美香を気にした様子もなく、貴大はなおも続けた。

「今後俺は、有吉さえ良ければ車で送るけど。何か不都合でもあるか？」

「不都合というか……」

社長の目が怖い、それだけじゃない。

「失礼ですが、専務はお付き合いをされている女性はいらっしやらないんですか？」

「急になんだよ」

貴大は声を出して笑った。美香は意地になって突っ込む。

「だって、専務はお見合いをされているんでしょう？ もしお付き合いされている方がいらっしやるなら、わたしなんかと食事したりドライブしたりするなんて、お相手の方が悲しまれると思います」

「……真面目だねえ。有吉は」

貴大が小さく吐息を漏らしたのがわかる。怒らせてしまったのかと思っただ、彼の表情を見ると、それでもなさそうだった。

「藤堂の伯父が世話をしたがるので、以前は、ほぼ毎月のように見合いをさせられた」

「ほぼ毎月」

「ああ。だけど去年の九月を最後に、見合いはしていない。特定の相手もない。ま、大輔は毎月のように、どこぞのご令嬢と見合いをしているが」

そうなんだ。専務はもう、お見合いをしていないんだ。

それがわかった途端、心が急に軽くなった。

「これで気が済んだ？ だから言っただろう？ 余計な気を回すなって」

「はい、あの。詮索したみたいで、申し訳ありません」

「いや……」

その後、美香は何を言えbaikわからなくなった。しばらく黙り込んでいると、急に車の流れが悪くなった。前方に「事故」と表示された電光掲示板が見える。

貴大は車を減速させた。

「週末は予定があるのか？」

「明後日の日曜日に、友人の結婚式に招かれています。明日はその準備で色々……」

「奇遇だな。俺も日曜日に、知人の結婚式に招かれてる」

「そうでしたか」

貴大の知人とはどういう人なのだろう。やっぱりお金持ちなのだろうか。

「プライベートな君の姿も、一度見てみたいな」

今夜の貴大は、美香を惑わすようなことばかり言う。オフの日、美香はたいいユルい服で過ぐすが、日曜日はフォーマルなピンクのワンピースで神前式に出る予定だ。

わたしだって、いつもと違うあなたを見たい——

去年の秋を最後に、お見合いを止めたわけを知りたい——

美香が藤堂フーズの社員になったのは、去年の夏。貴大が見合いを止める少し前だ。彼は初めて顔を合わせた時から親切で、美香は何度となく彼の言葉に救われてきた。しかし、彼が優しくしてくれるのは、美香が元気に秘書の仕事に励めば、彼の母親が機嫌良く仕事に就けるからだと思っていた。

だけでもし、他にも理由があるのだとしたら。

あれこれ考えているうちに、次第に眠くなっていった。

「有吉」

名前を呼ばれて目覚めた時、すぐそばに貴大の顔があった。美香は悲鳴を上げそうなほど驚いた。ほっとして顔を上げると、フロントガラスの向こうに、自宅マンションが見える。

「ごめん。あまりにもよく寝ていたから、起こすのが忍びなくて。きっかり五分、寝顔を見させて

もらった」

「ええっ？ も、申し訳ありません……。わたしったら！」

顔が熱くなってきた。慌てて手の甲で口元をぬぐう。大丈夫、涎は出ていない。ほっとしてシートベルトに手をかけたが、あせってしまい、なかなかはずせなかった。

貴大がくすくすと笑い出した。

「いいことを教えてあげよう。初めて乗る男の車では、眠らないほうがいい。君の身のためだ」

「本当に申し訳ありません。そんなつもりじゃなくて……」

「いいよ、気にするな。元はと言えば、うちのおふくろがこき使うせいだから」

「違うんです。あの、あまりにも乗り心地が良くて、安心したというか……」

「ふーん。俺の隣だと安心できるのか。じゃあ、許してやろう」

絶対にからかわれている。からかって反応を楽しんでいるのだ。

恥ずかしすぎて彼と目が合わせられなくなった美香は、礼を言ってドアを開けると、逃げるように夜の車道に降り立った。

「おやすみなさい」

「ああ。おやすみ。来週の金曜日、忘れるなよ」

「ええと……、はい」

しばしば美香をからかいはするが、貴大はいい人なのだ。自分のような者を労ってくれるのだから。

美香は軽く会釈えしやくをしてドアを閉めた。けれど車はすぐには動かなかった。やがて助手席の窓がするすると下がり、こちらを見つめる彼と目が合う。

「俺は、神様はいると思うよ」

「え？」

あの暗い車内で、貴大はハンドルに片手をかけて、まっすぐに美香を見据みすえた。彼は続けて言葉をつむぐ。

「悪魔もいるかもしれないが、神様も君のそばにいるよ、有吉。信心深く、何事にも真面目に取り組んでいれば、いつかきつと報むかわれる。じゃあ結婚式、楽しんで来いよ」

車が走り去っても、美香はその場を動けなかつた。どうやら、社長室での愚痴ぐちを聞かれていたらしい。しかし、彼の母親の悪口を聞かれたことへのショックより、励ましてもらったことへの喜びが勝った。

神様はいる。じゃあ、恋の神様はわたしにどうしろと……？

ゴージャスな専務を想い続けるのは自由かもしれないが、かといって、気持ちを伝えることなどできそうになかった。

3

貴大の言葉が頭を離れないまま日曜日になり、美香は短大時代の友人四人とともに、千葉の外房とせぼうにある白岬町しろしほまちを訪れた。この町にある白岬神社で、同じく短大仲間である片岡モエの神前式が行われる。

モエは白岬町の生まれで、地元の観光産業に携たずわる実業家の娘だ。ぱっと見は長身でがっちりした体形ではあるが、一途いちずな性格で、好きになつた相手にはとことん尽くすタイプ。

二人の姉がすでに嫁いでいた彼女は、優雅な婚活ライフを送りながら、家業を継いでくれる婿養子むこやしを探していた。そして去年の五月にめでたく料理人の夫、正平しょうへいと入籍。幸せな新婚生活をスタートさせている。

入籍の翌月にはこの白岬で披露宴ひろうぜんが行われ、ひよろりと背が高く実直そうな夫の横で、モエが豪華なウェディングドレス姿を見せてくれた。何故一年近く経つた今頃になって挙式をするのかといえば、モエが二人の思い出の神社で、満開の桜をバックに神前式を挙げたいと希望したからだ。

「だってここはあ、ダーリンとデートした大切な場所なんだから」

付き合い始めて間もない頃、二人はこの神社の境内けいだいで、たびたびデートを重ねたらしい。

「白岬神社は地元で有名な、縁結び神社なのよ」

一年後にまた挙式に行くのもなあ……と最初は渋っていた友人たちだが、縁結び神社というモエの言葉に、独身だった全員が参加を決めた。

美香は髪を巻いてハーファップにし、落ち着いたピンクのワンピースに黒のボレロを羽織っている。アクセサリーはパールのチョーカーと、おそろいのブレスレット。華やかな装いの友人たちの中にいても、見劣りすることはないだろう。

白岬神社へは、東京から特急で一時間。さらに駅から車で二十分ほどかかる。

大きな鳥居と、対になった狛犬。拜殿の入り口には手の込んだ細工を施した欄間があり、拜殿の奥の本殿を含め、神社全体が地元の文化財に指定されているようだ。決して大きな神社ではないが、その佇まいは長い歴史を感じさせた。

今は拜殿に向かって境内を縦断するように緋色の毛せんが敷かれ、親族以外の参列者がその両端に集まっている。

「桜が綺麗ね。モエがこの時期に式を挙げたがった気持ち、わかるわー」

美香の隣で、同じく式に招かれた明日香が言った。境内の桜は見頃を迎えていて、外で式の開始を待つ人々の目を楽しませている。

「でも、他に人がいないわよ？ 有名な縁結び神社っていう感じはしないかな」

そう言ったのは、歯科医院の受付をしている弥生だ。弥生の言葉に友人一同が周囲を見回す。桜は綺麗だし、境内の掃除は行き届いているが、確かに式に参加する人々以外の参拝者は見かけない。交通の便の悪い田舎町だし、メジャーな縁結びスポットではないのかもしれない。

「モエはああ言ってたけど、実はあまりご利益がないのかも」

そんな不謹慎な言葉を囁いたのは、保育士の佐智子だった。美香はつい口を挟んだ。

「その辺にしておこうよ。おめでたい日なんだから」

友人たちが苦笑いした時、どおんと大きく太鼓が鳴った。参列者一同が顔を上げると、今度は雅やかな雅楽の音色が辺りに響き始める。

毛せんの前端に、黒い冠に白い装束を着た神職の男性が姿を現した。参進と呼ばれる儀式で、神職や巫女に先導された新郎新婦が、拜殿に向けてゆっくりと行進するのだ。

本来ならば参列者である美香たちも後ろに続くのだが、白岬神社は行進できるスペースが短いので、両脇で待機となった。

「来た来た。へえー、なんだか本格的ねえ……」

佐智子が小声で言った。雅楽の調べが次第に大きくなり、先頭の神職がゆっくりと近付いて来る。何かで読んだが、神主という呼び名は俗称のようなもので、正しくは神職と呼ぶらしい。

その神職の後ろにもう一人神職が続き、和装の雅楽隊、朱色の袴を穿いて、髪にかんざしを飾った巫女が続いた。新郎新婦は巫女の後を歩いている。

「うわ、モエが着ているのって何？」

「まさかの十二単とか。人とは違ったことをやりたがるコだからね、モエは」

美香も友人たちが指さすほうを見る。巫女の後ろに色鮮やかな着物を重ね着し、介添え人に裾を持たせてそろりそろりと歩くモエの姿が見えた。

お雛様ひなさまのようなかつらに金色かみなりの冠かむり。隣にはこれまたお内裏様だいりさまのような、シックな紫の衣装を着た正平の姿があった。

友人たちはモエ夫婦についてあれやこれやと囁き合っていたが、急に話題が変わった。

「ちよっと、先頭の人を見てよ。イケメン神主！」

「どれどれ……。えっ！ 誰あれ、素敵」

「うそ、見えないー！」

「やば……。どこかの役者じゃない？ あんな神主いるの？」

自然と声が大きくなり、他の参列者からジロジロ見られる。美香は静かにするようにと人差し指を立ててから、自分も爪先立つまずきだって、近付いて来た先頭の男性に注目した。

すらりとした長身に、黒い冠をかぶり、あご下ひもとで紐を結んでいる。首元がスクエアになった平安貴族のような白い上衣じょうふの下は、同じく白い袴はかまのようなものを穿はいていた。

彼は口元をきりと結び、伏し目がちに歩を進めている。その立ち振る舞いからは厳肅げんしゆくな雰囲気ふんいきが醸かみ出だされていた。それでも彼が若く、まるで映画か何かから抜け出てきたように美しいのは、誰の目にも明らかだ。

「やだ……。本当に素敵」

黒と白という至ってシンプルシンプルな装まいなのに、圧倒的な存在感があつて、完全に主役を食っている。モエと正平は笑みを浮かべながら行進していたが、友人たちは神主に心を奪われ、モエそっちのけで、神主に向けてスマートフォンスマートフォンのシャッターボタンを押し続けた。

あれ？ あのどこかで見たような……

神主が美香の前まで来た時だ。まるで現代の光源氏かと見まがうようなイケメン神主の横顔に、美香は既視感きしかんを覚えた。懐かしくて切なくて、ひどく胸がざわついた。

「かしーこみー、かしーこみー……」

イケメン神主は独特の節回しふしまわをつけて、祝詞のりとと呼ばれる神社特有の文章を読み上げていった。式の最中もずっと考えていたのだが、結局美香は、イケメン神主をどこで見たのか思い出せない。もつと近くで顔を見ることができれば良かったのだが、美香たち友人は拝殿はいでんの最後列に座らされ、遠目に式を見守るしかできなかったのだ。式は滞りなく進み、やがて終了した。

ま、いいか。

気にはなつたが、美香にとってはどうでもいいことだ。彼女の心にいるのは貴大だけなのだから。外に出ると、記念撮影の準備が始まっていた。まずは新郎新婦のツーショット、それから親族での撮影。最後に全体での集合写真を撮るそうだ。友人たちはイケメン神主を探しに行ってしまったので、美香は一人で近くをぶらつくことにした。

境内けいだいにはおみくじが結び付けられた結びどころや、古いお札ふだを納める納札所のうさつしよ、たくさんたくさんの絵馬がかけられた場所があった。さらに進むと四方を縄で囲われ、しめ縄の巻かれた大木がある。近付いてみると、「ご神木」と書かれた立て看板があった。

ご神木か。お願いしちゃうかな――

木の前に立った美香は、背筋を伸ばすと、ご神木に向かって両手を合わせた。ここがモエの言うとおりの有名な縁結び神社なら、きつと願いを聞いてくれるはずだ。

神様お願いします。専務、いえ貴大さんともつと仲良くなれますように。

身分違いは百も承知。結婚なんて望まない。ただ彼のそばに、ずっといたい。それだけ——
目を閉じてそう願った直後。

その願い、かなえてあげましょう。

「えっ？」

頭の中にそんな声が響いた。

驚いた美香は慌てて辺りを見回したが、誰もいない。気のせいだろうか。いや、確かに人の声を聞いた。それも女の声だ。

美香は思わず目の前のご神木を見上げた。四方に伸びた枝が、春の風にゆったりと揺れている。なんだか気味が悪くなり、その場を去ろうとすると、何かに足を取られてつまずきそうになった。

「わっ！」

慌てて足元を見れば、地面に盛り上がった木の根っこ付近に、左足の靴のヒールが挟まっている。

「いやだ、どうしよう」

足を引いてみたが、抜き取れない。細めのヒールが、見事に根の隙間に刺さっていた。無理に動

かせば、ぼきりと折れるかもしれない。

どうしてこんな細いヒールを履いて来ちゃったんだろう。

美香はその場にしゃがみ込み、手で靴のかかと部分を動かしてみたが無駄だった。

「どうなさいました？」

困り果てていると後ろから声がした。衣擦れの音がして、光沢のある純白の装束が美香のすぐそばで立ち止まる。さっきのイケメン神主だ。

「靴が引つかかってしまってます……」

しゃがんだまま、美香は顔だけ上に向けて言う。顔を拝むチャンス——と思ったのだが、目が合った瞬間、お互い、あつと声を上げてしまった。

「せ、専務……。藤堂専務ですよね？」

「有吉……。結婚式って、片岡さんのお嬢さんだったのか」

イケメン神主の正体は、まさかの貴大だった。どうりで横顔に見覚えがあったはずだ。しかし何故貴大がこんな場所で、神主の真似ごとをしているのだろう。

「モエはわたしの友人なんです。専務こそ、ここで何をいらっしやるんですか？ その格好は……」

「しっ！ 静かに」

貴大は立ち上がりかけた美香を制するように、人差し指を口の前に立てた。そして自らもその場にしゃがみ込むと、美香に顔を近づけて囁いた。

「今は専務じゃない。ここではその言葉を口にしないように」

「は、はい……」

「俺が靴を取るから、とりあえず立ちなさい。手を」

貴大は立ち上がってそう言うと、美香の目の前に手を差し出した。言われるがまま、美香はその手を取った。すると温かくて大きな彼の手が美香の手をしっかりと握り、引き上げてくれた。

コスプレにしては似合いすぎる、貴大の神主姿。改めて面と向かうと、なんと言葉をかけていいかわからない。

美香を立たせてすぐ、貴大は再びその場にしゃがみ込んだ。

「俺の肩につかまれ、有吉。それから左足を上げるんだ」

「申し訳ありません、せん……、いえ、神主さん」

彼の肩に手を置かせてもらい、そっと左足を上げた。貴大は片手で袖を押さえ、もう片方の手で木の根に挟まってしまった美香のハイヒールに手をかける。

その途端、するつと、ハイヒールが持ち上がった。

「うそっ！」

「ヒールは折れてないし、傷も付いてない。良かったな」

貴大は傷がないかどうかハイヒールを確認してから、シンデレラの王子きながらに美香の前に置いてくれる。にわかには信じられないが、美香は礼を言い、急いでハイヒールを履き直した。

「お手を煩わせて申し訳ありません。でも、さっきは本当にびくともしなかつたんです」

まるで美香をその場に釘付けにするみたいに、靴が頑として動かなかった。先ほどの声といい、靴といい、この神社には何かあるのだろうか。不思議でならない。

「謝らなくていいよ、靴を取るのに、ちよつとしたコツが必要だったんだ」

「そうでしょうか」

「ああ。それより写真撮影が始まるから、早く行ったほうがいい」

「はい……。じゃあせん……いえ、神主さん」

ぺこりと頭を下げた美香が立ち去ろうとした時だ。

「美香ちゃん」

貴大はいきなり美香の名を呼ぶと、腕をつかんで自分のほうに引き寄せた。白くふんわりと広がる装束が、美香を包み込むようにひるがえる。

「桜色のワンピースが良く似合ってる。上品で女性的でとても君らしい」

「あ……、ありが……」

見つめられてそう言われ、美香の気分は一気に天へ駆け上る。

「俺と君が知り合いだということは、誰にも言わないように」

さらに顔を近付けて、貴大は美香の耳元で囁いた。耳朶に触れる彼の息に、美香は膝が震えそうになる。

「……もしかして、藤堂フーズの重役だということを隠していらつしやるんですか？」

「小難しいことは考えなくていい。片岡さんにも他の友人にもしゃべるなよ。もちろん、明日会社

に行っても、今日見たことは誰にも言うな」

最後は命令口調になった。なんだろう。いったい貴大は何を隠しているのだろうか。

「わかりました。専務がそうおっしゃるなら……」

「ありがたい、美香ちゃん。この件については、日を改めて話すから」

頼んだぞ。貴大に背を押されて、美香は写真撮影の場所に向かう。まだ少し胸がドキドキしていたが、名前で呼ばれたことも、貴大と秘密を共有することも、妙に嬉しかった。

高鳴る胸を鎮めるように手で押さえながら、拝殿の前に集まっていた友人たちの許へ急ぐ。友人たちは戻って来た美香に言った。

「あのイケメン神主、この宮司さんの息子なんだって」

「そうなんだ……。えっ！ 息子？」

ということは、もしかしてその宮司が社長の別れた夫？ 社長は神主の嫁だった——？

4

まづいな——

愛車を飛ばして帰途につく間も、貴大の頭の中は想定外の出来事にどう対処すべきかで一杯だった。

六時過ぎに自宅マンションに戻ると、留守中に上がり込んだ兄の大輔が、キッチンで食事の用意をしていた。両親が離婚して以来、長らく母と兄と三人で暮らしてきた貴大だが、四年ほど前から、ベイエリアにある都内のマンションで一人暮らしをしている。

「何してるんだ。お前、今日は見合いのはずだろう？」

得意げに料理の盛り付けをしている兄に向かって、貴大は声をかけた。

「俺が作ったアスパラのミラノ風、上々の出来だぞ」

軽口で返した大輔は、呆れ顔の弟に気付いて顔を上げる。

「心配するな。やるべきことはやって五時前にはお開きになった。それよりお前の首尾はどうだ？」

貴大は片岡家からもらった土産の品々の入った紙袋を、キッチンカウンターに置いて言う。

「緊張したが、上々だ。生まれて初めて齋主をやった」

「齋主……。ということはお前が神前式を仕切って、祝詞も読み上げたのか？」

「ああ。予定では修造さんがやるはずだったけど、これも経験だからと言われて」

「じゃあ、本格的な神主デビューってことか」

「そんなとこだ」

フライ返しを持ったまま、大輔は感心したように拍手した。細身のフレームのメガネに、紫のシャツ。袖は肘まで捲り上げ、腰に辛子色のエプロンを巻いている。

「で、親父の体調は？」

「あまり良くなかった。この式を見届けたから、安心して入院できると言ってた」

「そうか」

めったに表情を変えない兄が、父の様子を聞いて顔を曇らせた。広いリビングのソファに向かう貴大の後を黙って付いて来る。

「とりあえず何か飲むか？」

「ビールくれ。キンキンに冷えてるやつを」

「待ってる、一緒に乾杯してやる」

またキッチンに引つ込んだ兄を横目に、貴大はジャケットを脱いでダイニングチェアの背にかけ、そしてテレビの前に二つ並べて置いた、一人がけのソファに腰を下ろした。留守の間に大輔が掃除もしたのか、ソファの前のテーブルに出しっぱなしにしてあった雑誌やリモコンが整頓されている。

会社ではクールな副社長を装っているが、大輔は料理や掃除が得意な家庭的な男だ。その上家電オタクで、実家には選び抜かれたこだわりの生活家電が溢れている。

その兄が、栓を開けた瓶ビールを二本手にして戻って来た。片方を貴大に差し出す。

「ほれ」

「サンキュ」

渡されたビールはよく冷えていた。大輔は残りの一本を持ったまま隣のソファに腰を下ろすと、軽くビールを掲げて言った。

「お前の初めてのご奉仕を祝して乾杯」

貴大も真似してビールを掲げ、そのままぐびりとあおった。ほろ苦いイギリス産のビールが、空腹の胃袋にじんわりと染みていく。

希和子の別れた夫であり、貴大と大輔の父である三枝博之は、白岬神社の宮司だ。三枝家は「社家」と言って、代々神職を世襲してきた一族である。今日の神前式は父が斎主を務める予定だったが、体調が悪化したせいで、貴大が代わりを務めることになった。

博之は一年前に癌の宣告を受け、今は通院しながら療養中だ。修造というのは、父の妹の深山瑠璃子の夫で、博之と同じように隣の神社で神職をしている。

貴大は、母に内緒で大学四年の時に神職の資格を取った。階級的には下っ端なもの、一人前の神職——すなわち神主になった。その後は仕事をすの傍ら、父の神社が忙しい時だけ手伝いに行っている。

会社でこの事実を知るのは、兄の大輔だけだ。つい数時間前、美香もそこに含まれたが。

離婚後の母は、父が息子たちに面会することを許さなかった。もし内緒で貴大が神主の資格を取り、こっそりと父を手伝っていると知ったら、天地がひっくり返るほど怒るだろう。

「ところでおふくろは？」

「和明さん夫妻と、歌舞伎座に行った。あと二、三時間は一緒だろう。お前は友人の結婚式で帰りが遅くなると信じてるから、安心しろ」

兄がニヤッと笑った。女性経験はそれなりにあるが、恋愛には興味がないと言い切る兄は、母に勧められるままに見合いを繰り返している。母親が姑にいびられたせいで離婚したので、結婚相

手は母が気に入る女性にしたいそうだ。

「なるほどな。さすがは兄貴、手抜きはないか」

「当たり前だ」

大学の同期生だった両親は、神社の跡取り息子と巨大企業グループの令嬢という素性を知らぬまま恋に落ち、希和子が妊娠したことにより、卒業と同時に結婚した。希和子は慣れない土地で神主の嫁として頑張ったが、博之の浮気と姑の嫁いびりに耐えかね、貴大が七歳の時に息子たちを連れて家を出たのだ。

結婚に反対した藤堂の家とは絶縁状態であったので、離婚後の数年間、母子は極貧生活を送ることとなった。

希和子は現在の地位を手に入れるまで、辛酸を嘗め尽くした。ときどき別れた夫のことをマスクミが嗅ぎ回るが、希和子が実家と和解したため、スキヤンダルを嫌う藤堂の伯父が裏で手を回してひねり潰している。

「俺がおふくろの会社を継ぎ、お前はあの神社を守る。もしお前が金銭的に困っても、俺は絶対にお前を見捨てない。お前が神主の資格を取った時にそう決めたらどう？ 貴大」

大輔の言葉に、貴大は現実を引き戻された。

「ああ。大丈夫だ、よくわかってるよ」

大輔も貴大も、苦勞して育ててくれた母には心から感謝している。

離婚して藤堂の名字が変わってからは、母のためにも父方の身内とは一切会わずに過ごしたほ

どだ。

しかし貴大が二十歳の時、母の目を盗んで会いに来た父から、祖父母の死と、祖母が死の間際まで、孫のどちらかに神社を継いでほしいと願っていたと聞かされた。

十数年ぶりに会う父はめっきり老け込み、懐かしい神社も経営の悪化で人手不足に悩まされているという。それを知った時、憎しみはどこかに消え去り、やがて兄弟は、父を支えることを決心した。

貴大は空になったビール瓶をテーブルに置いた。今考えるべきは、そのことではない。美香にいてだ。

「少々まずいことになった。会社の女の子に見られたんだ」

「見られた……？ 誰に何を」

「有吉美香だ。新婦の友人として、彼女も式に招かれていたんだ。ご神木の前でばったり会って……」

「ほう。美香ちゃんか……。お前の大好きな」

一瞬険しい顔になった兄だが、美香の名を聞いて口元を緩めた。

有吉美香。確かに大好きだ。

目を閉じれば、雅楽の音色が響く中に、品の良い桜色のワンピースを着た美香の姿が浮かぶ。彼女はいつもと違う香水をまとっていた。甘くて女らしい香りだ。ほっそりとした足が綺麗で、

立ち上がらせた時、思わずドレスの胸元の谷間に目が行ってしまった。

職務も忘れ、貴大はつかの間、不埒な想いに囚われた。

美香が入社したばかりの頃は、社長のワガママに振り回されている彼女を、興味深く見ていたけどだった。

そのうち、社長の面倒な要望にもせつせと応える彼女に本気で惹かれるようになった。貴大は資産家の令嬢やモデル並みの美女には魅力を感じない。

時代遅れかもしれないが、ひたむきでけなげな女性に憧れるのだ。社長のラテを買うために息を切らしながら走る美香に心を癒され、いつの間にか全力で愛してやりたいと思うようになった。

それほど惹かれながらも、頑張れと励ますだけで半年以上が過ぎてしまっている。

「彼女には何も話してないのか」

大輔が探るように言う。貴大は頷くことしかできなかった。

「当然だ。なんだかんだ言っても、彼女は社長の腹心だ。下手をすればこの十年の努力が水の泡になる。だから口止めした」

「口止め……。でも、もう時間がないぞ。隠したままでいいのか？」

「たった一度、家まで送っただけだぞ。俺のことをどう思ってるかさえわからない」

「じゃあ明日の晩、ホテルのスイートに連れ込んで、夜通し抱いてやれ。そして一言、俺と一緒に白岬に来てくれと言えればいい。彼女が思わず頷くような強引さを見せろ」

冷徹な目とは正反対な熱い兄の言葉に、貴大は嘩然とした。同時に兄の提案を頭の中で想像してしまい、淫らな誘惑に負けそうになる。

「お前、口のきき方がだんだんおふくろに似てきたな。大切だと思うからこそ、手が出せないんだろうが」

「それがお前の悪いところだ。他人の顔色をうかがいすぎる。好きなら奪え。何故さつさどものしない。他の男にさらわれるぞ」

奪えと言われても。

母親がああピンヒールを履いた悪魔で、伯父は藤堂グループ総帥だ。そんな肩書きを背負ったままうかつに手を出しては、美香は戸惑い、離れていくだろう。

すべての女が金の匂いに惹かれるわけではない。ことに美香は、身の程をわきまえすぎている女だ。

でも、彼女はご神木の前で俺の手を取った。

あの木には古くから語り継がれる恋物語がある。遠い昔、戦で傷付いた武将がああ木の根元に倒れていると、通りかかった町の娘に助けられた。二人は恋に落ち、やがて身分の違いを乗り越え結婚された。

町の郷土資料館にも文献が残る、古代のロマンス。あの木の下で手を取り合った男女は結ばれる——いつしかそんな言い伝えが広まり、白岬神社は縁結び神社と呼ばれるようになった。

俺たちも結ばれる運命にある。

貴大はそう確信していた。美香にすべてを打ち明け、二人の関係を一步先に進めようと、真剣に考え込んだ。

月曜日の午後六時過ぎ、貴大は帰り支度をしている美香を拉致するように車に乗せ、都心から離れた場所まで車を飛ばした。たどり着いたのは、江戸川近くの雑居ビル。このビルの五階で、高時代の友人が洋食屋を営んでいる。

社長はもう一人の秘書と営業部長を伴い、神楽坂の料亭でロシアのVIPを接待中だ。ここまで来れば遭遇することもないと考えたのだ。

「で。昨日の約束は守ってくれただろうな」

「は、はい……」

貴大は、ピザと飲み物を運んで来たスタッフが出て行くなり、そう切り出した。二人が案内されたのは、店の奥の小さな個室で、気をきかせた友人が、テーブルの上に花やキャンドルを飾ってくれている。室内はほの暗く、窓からはベイエリアの夜景も見えたが、美香は二人きりでいるのが落ち着かないのか、しきりに周囲を見回している。

「そうか。色々無理を言っただけ悪かった。とりあえずピザでもつまみながら飲めよ。事情を説明するから」

「はい。では……」

ピザと一緒に美香にはカンパリソーダを勧め、自分はウーロン茶を頼んだ。

「昨日のことなんだが、実は俺は神主、いや、正しく言うと神職の資格を持つてるんだ」

大輔に言われたように、貴大はすべてを打ち明けるつもりで来た。意外にも美香はさほど驚か

なかった。

「やっぱり、そうでしたか。式の後の食事会で、友人たちがイケメン神主さんの話題で盛り上がりまして……。友人から、専務があん社の宮司さんの息子さんだと聞きました」

「なんだ、もうばれてるのか」

少だけ拍子抜けした気分になる。貴大は頬杖をつきながら、ため息を漏らした。

「三枝さんとおっしゃる方が、専務のお父さんで、社長の……?」

「別れた亭主だ。三枝の家は社家といって、ようするに、白岬で代々神社の宮司を世襲してきた家なんだ。けどこの二年ほど親父の体調が悪くて、俺が手伝いに行く回数が増えた」

「そうでしたか。わたしはつきり、専務のサイドビジネスだと思いました。失礼ですが、この件は社長には?」

「隠している」

美香が息を呑んだ。貴大はウーロン茶を一口飲むと、慎重に話を進めた。

「親父とおふくろは大学の同期生で、いわゆるデキ婚をしたんだ。だけど祖母の嫁いびりや親父の浮気のせいで別れた。その後のシングルマザー時代は君も知っているとおおりだ」

「ええ。社長の著書で読みました。とにかく貧乏で、食べ物に事欠いたと……」

「全部事実だ。俺が小学生から中学生の頃にかけては悲惨だった。でもおふくろは俺たちのために、藤堂の力を借りずに死にもの狂いで働いたんだ。そんなおふくろだから、俺が三枝の家の手伝いをしてると知ったら、即刻親父の息の根を止めに行くだろう」

その場を想像したのか、美香は両手を胸に当てて小さく身震いした。

「でも専務。社長に反対されるようなことを、どうして隠れてまでなさるんですか？」

その言葉には、わずかに非難が込められているように感じた。

「手塩にかけて育てた息子さんが、隠れて元ご主人と通じていると知ったら、ショックを受けられるでしょう。社長がお気の毒です」

「確かに親父はろくでなしだ」

貴大の脳裏に、やせ衰え、神職にはあるまじき無精ひげをうつすら生やした博之の顔が浮かぶ。昔はああではなかった。凛々しい神主だと、近所でも評判だったのを覚えている。

父は妻と実母の間で板挟みになり、現実逃避するかのよう浮気をした。結果、妻と二人の息子を失ったのだ。

「それでも親なんだ」

「専務」

「あの神社は縁結びで知られていたが、親父たちの離婚のせいで評判が落ち、参拝者も減った。今では神職は親父一人になり、後継者の問題もある。放っておけないんだ。後は亡くなった祖父母だ」

先代宮司である祖父は貴大が高校生の時に亡くなり、祖母はその三年後に逝った。その事実を告げられた時の喪失感。いまだに忘れられない。

「祖母は、孫のどちらかに神社を継いでほしいと願っていたそうだ。祖母は確かにおふくろには

きつく当たっていたが、俺と大輔は可愛がってもらった。それなのに、離れて暮らしていたから何もしてあげられなかった」

「だから神主になろうと？」

「そう」

空気が重くなる。美香は、心もち明るい声で質問をしてきた。

「でも神前式には雅楽隊や巫女さんがいました。人手が足りなさそうには見えませんでした」

「あれは片岡さんがよその神社から自前で連れて来た助っ人だ。うちの神社は、神職は親父一人。大きな祭りがある時はバイトの巫女を雇い、それ以外は地元の人間で、神職に協力してくれる役割の総代や、叔母とその旦那が手伝いに来てくれる」

「そうだったんですか……。神社も色々大変なんです」

「地元の人たちも、俺が大輔に戻って来てほしいと言ってくれている。大輔はおふくろの会社を継ぐべきだと思う。だから俺が親父の跡を継ぐ。そう考えたんだ」

「そうですね……。えっ、継ぐ？ 手伝いではなく、専務は神社のお仕事を本職になさるおつもりなんですか？」

「いや、その……。なあ、美香ちゃん」

貴大は身を乗り出し、テーブルの上の美香の手を取った。そうして、うろたえる美香の目をじっと見つめる。

自分をこき使う、悪魔のようなボスの身になって考える辺りが、いかにも美香らしい。

優しい子なんだよな。だからおふくろにいいように使われる。

しかし、その優しさに貴大は惹かれていた。

「明日にでも専務を辞めて神社の神主になる——。そう言ったら、美香ちゃんは一緒に来てくれるか？」

「え？」

「おふくろは激怒して、親子の縁を切るだろう。神社の件では、前にも一度ケンカになってるんだ。でも心配はいらない。俺には蓄えがある。自分の妻子に苦勞をかけることはないはずだ。だから美香ちゃん」

「さ、妻子？」

美香は目を丸くした。貴大はそれを無視して美香の頬に触れる。びくりと肩を震わせた彼女の頬を、手のひらでそっと包み込む。温かくて、かすかに震えるすべすべの肌。今日は珍しく、髪を下ろしている。緩く波打つ柔らかい髪が、妙に女っぽい。

ふつくらしした唇は、キスしたらどんな味がするだろう。

「美香ちゃん。俺と……」

貴大は頬の線に沿って指をすべらせ、美香のあごを持ち上げた。

俺と一緒に白岬に来てくれ。君はどうしたら俺のものになってくれる？

静寂とテーブルに置かれたキャンドルの明かりが、貴大を大胆にした。しかし——

「そんなご冗談をおっしゃってはいけません、専務……！」

美香はわずかに身を引いて、貴大の手から逃れた。

「確かにわたしは社長の秘書ですが、ヘッドハンティングするような価値はありません。それに専務がいなくなつては社長が悲しまれます。会社も困ります」

ヘッドハンティングだと……？ おいおい。

勇気を振り絞つての愛の告白なのに、どうしてそんな結論にたどり着くのか。じれったくなった貴大は、否定しようと慌てて口を開いた。

「ヘッドハンティングなんかじゃないよ。俺は君を——」

けれど美香はそれ以上聞きたくないと言わんばかりに、首を横に振る。

「専務は優しい方です。亡くなったおばあ様のために神主の資格を取って、ご病気のお父様のために神社のお手伝いをなさる。もちろんお母様のために重役としての責務も果たされている。感動します。わたしの憧れている専務がそんな人で嬉しくて……、あ」

そこまで言ってから美香は口元を押さえて、明らかに恥じらう素振りを見せた。

「申し訳ありません！」

美香はぺこりと頭を下げた。

「ずっと専務に憧れていました。今日お話をうかがって、ますます専務が好きになりました。ですから」

「ですから……？」

顔を上げた美香は、まぶしい笑顔を貴大に向けた。

「社長とお話しになるべきです」

そして論ずように言葉を続けた。

「時間をかけて説得なされば、わかってくれるはずですよ。その頃には会社ももっと成長して、安定期に入るのではないのでしょうか。それまで辛抱なさるほうが……。縁を切るなどもつてのほかです」

「美香ちゃん」

「今うかがったことは誰にも言いませんから……。あ、ピザが冷めてしまいましたね……」

「いやいいよ、例えばの話だよ」

「専務」

彼女は泣きそうな顔をしていた。貴大はなだめるように言う。

「例えばの話。冗談だ。真に受けなくていいから」

そうさ、真に受けなくていいよ。今はまだ。

自分の中で、何かが急速に冷めていくのを貴大は感じた。

あと十日も経たないうちに、貴大は会社を去り白岬に帰るといふ極秘作戦を執行する予定だ。もし美香がうんと言ってくれたら、彼女を連れて行こうと考えていた。自分たちはいわゆる恋人同士ではないが、一緒に暮らすうちに深い愛が生まれるだろう。

彼女が望むなら、幼稚園でも保育所でも好きな仕事に就けるよう協力するつもりだ。

しかし美香は貴大より、秘書の仕事、いや、すすすすこルールのほうが大事らしい。その事実

が貴大の全身を駆け巡り、雷に打たれたようなショックを与えた。

「どうやら振られたようだ」

ディナーの後に美香を送り、そのまま自宅に帰った貴大は、大輔に電話で報告をした。

「スイートルームに連れ込んだのか。むせるほどのバラを用意したか？」

「いや、友人が経営する洋食屋に連れて行った。臨海公園の夜景が見える店だ」

「この、ヘタレ野郎が」

大輔の容赦ない言葉に、貴大は心が折れそうになる。

「それでも予定どおり決行だ。ほんとに好きなら、一度や二度の失敗で諦めるな」

「諦めねえよ」

そうとも、諦めるものか。

自分たちはご神木の加護を受けた。必ず、彼女は俺のものになるのだから。

はあ……。キスされるかと思った。

貴大のせいで、美香は夜遅くまで寝付けなかった。